大阪観光大学
Osaka University of Tourism

Q&A「楽しむ力」

第 1 版

☆大阪観光大学は「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」を教育理念としています（「憲章2022」）。観光を対象として観光学を学ぶ観光大学こそが正面から掲げることができる教育理念です。この教育理念の下で、大阪観光大学は、人生を「楽しむ力」を備えた世界市民と職業人を養成することを目標としています。

この小冊子では「楽しむ力」とは何なのか、なぜそれが観光学の課題となるかについて Q&A 形式でまとめてみました。

- 楽しむ力とは何か……1
- 今、なぜ「楽しむ力」が大切なのか？……2
- 観光とは何か？……3
- なぜ私たちは観光をするのか？……4
- 観光学を学ぶ楽しさとは？……4
- 「楽しむ力」と「生きぬく力」……5

● 楽しむ力とは何か

「楽しむ」ことがとても大切だということを否定する人は、ほとんどいないでしょう。自らの自発的な欲求に従って活動している時、またその欲求が達成された時、人は満足感や幸福感を強く感じることができます。しかし、こうしたゴールに至る道のりは多様です。

例えば、登山を考えてみましょう。この場合、頂上を極めたいというのがさしあたりの欲求です。しかし、そのための体力トレーニングが不足していたり、地図が頭に入っていなかったりすれば、目的の達成はそれだけ困難を増します。満足感よりは不安感や苦痛が支配します。これに対して入念な準備を行っている人は、頂上に近づいていくプロセスを楽しむ余裕が生まれます。動植物の生態や地質に関する知識を身につけていると、楽しさの感覚はさらに高まるでしょう。このように、楽しむという行為は、まず楽しみたい対象・目的が存在することがその前提です。その

上で、それを達成する道筋の認識や主体的な能力の準備の有無が苦痛と楽しさの分岐点となります。楽しむ力とは、これらの人間力の総体を言います。

現代社会では、人間的欲求はかつてなく多様化・高度化しています。人は、それだけ多様な諸課題の選択に日々直面しその達成に挑む生活を余儀なくされます。社会のこの段階では、自由かつ主体な人生をどれだけ楽しく送っていくことができるかという問題意識として現れてきます。そしてまた、それが課題に関わる能力の発達に依存する限りで、この実現を左右する人間力は、今日では何よりも楽しむ力として現れることになります。

● 今、なぜ「楽しむ力」が大切なのか？

楽しみたいという感覚は、とくに今世紀になって生まれた若い世代の人たちにとっては、あまりにも当たり前の感覚だと思います。しかし、いつの時代もこうだったわけではありません。20 世紀後半の日本では、第 2 次大戦後以降の時期に的を絞っても、いくつかの大きな変化がありました。

まず、日本社会が初めて本格的な都市化と高度経済成長を開始した戦後 1970 年代半ばまでの時期は、何よりも勤勉さ、まじめさこそが最大の美徳とされました。もっと言えば、人生において何をおいてもまじめに働くことこそが一番大切でした。それは、企業における終身雇用制度の発展とも結びついて、「ワーカホリック」（仕事中毒）の大量生産に繋がっていきます。

これに対して、70 年代後半以降になると、『まじめの崩壊』（1991 年出版）という本のタイトルに象徴されるように、まじめさは主役の座から外れ、時にはあざけりの対象とすらなりました。それに代わって、それまでの価値観に反発する若者（「新人類」等）が注目される時代の到来です。まじめさよりは、愉快さや面白さといった楽しさをイメージさせるキャラクターへの共感が広がりました。それは、集団に埋没するよりは、個性を重視する意識の発展の時期でもあります。

さらに今世紀に入ると、私たちの実践が、労働時間と自由時間の両面で一段と高度化・多様化する中で、仕事をするにせよ趣味の世界を生きるにせよ、好きなこと、魅力を感じることとの出会いと探求が人生観の中心に定着するようになります　。かつて対抗的であった「まじめさ」と「楽しさ」という二つの価値観はここでは高度な次元で融合し、いわば「まじめに楽しむ」ことが当たり前の時代となってきました。受動的な「楽しさ」から攻勢的なそれへの発展です。

楽しむことの対象や手段の発展と共に、その実体がこのように変化・発展してくると、私たちが持つ「楽しむ力」の内容とレベルがこれまでになく問われるようになります。人生を最大限に充実させ楽しめるかどうかは、私たち自身を取り巻く環境および自分自身の変革という実践の中で、「楽しむ力」をいかに育て発揮していくかにかかっています。楽しむことの象徴でもある観光を大学名に冠する本学は、このような意味において「楽しむ力」の発展を切り開いていく社会的責務を持っています。

●観光とは何か？

『広辞苑』（第 6 版）は、観光を「他の土地を視察すること。また、その風光などを見物すること」と説明しています。しかし、現代の観光は、かつてのそれとは比べものにならないほど「他の土地」は広域化・グローバル化し、内容的にも多様化・高度化しています。こうした状況に鑑み、大阪観光大学では観光を非日常空間への移動を伴う自由な鑑賞・創造・交流活動と捉えています。

ここで「自由」とは、さしあたり自分の欲求と意思に基づいて行う行為であることを意味します。「鑑賞」とは言い換えれば消費・享受、「創造」とは生産、「交流」の実体はコミュニケーションです。すなわち、五感を駆使して様々なものを自らに取り込み、一方ではその成果を基に自らの外側に何かを作り出すことに挑戦する、そしてこれらの活動を何よりも他者と共有し、一緒に体験しあう活動です。これらの諸活動は、日常における労働や余暇活動を含めた私たちの日々の多様な実践活動の実体でもあるわけですが、観光は自由意志に基づくものであると共に非日常世界において現れるという点で、労働や余暇活動一般と区別されることになります。

現代社会では労働のあり方もかつてのとは大きく異なります、自由時間における諸活動も量的・質的に顕著に発展し、そのあり方が生きがいを大きく作用する時代に私たちは生きています。なかでも非日常世界への移動を伴う観光は、自由時間における余暇活動を象徴する行為であると言うことができます。

観光学とは、こうした観光行動とその活動を取り巻く諸現象・環境を対象とする学問であり、したがってまた私たちの人生のあり方を考え、生きがいを解明する科学です。

●なぜ私たちは観光をするのか？

誰でも普段生活する世界を離れ、新しい世界に出かけることがあります。その目的や期間は様々でしょう。こうした行為のうち、義務としてではなく自らの欲求と自由な意思に基づいて行う行為の多くが観光です。したがって、なぜ観光をするのかという問いは、なぜ人は新しい世界に行きたい、新しい世界を知りたいという欲求を持つのかという問いに行き着きます。

新しい世界を知りたい・体験したいという欲求は、人間的欲求の発露であるとともに、そのことがまた欲求の量と質を発展させます。例えば、日常生活においてどこかの国の料理と出会ったとして、本場の料理を体験してみたいとの思いからその国まで足を運ぶこともあり得るでしょう。旅行者はそうした料理を生み出した独自の社会的文化的背景を肌で体験する中で、料理そのものをもっと深く理解するようになります。さらには、自分で作ることにも挑戦していくかも知れません。料理を味わう際の味覚の発展がそこに生まれると共に、そのことがまた新たな知的・感性的欲求を生み出していきます。

つまり、こうして得られる知性・感性の発展こそが人間欲求の実現可能性を広げ、その意味で人間的自由の幅と深さを広げていくことになります。一般的に、労働=仕事こそは、知性・感性の発展を生み出す人間的活動の基本です。しかし同時に、自由時間における自由な活動もまたこれを補完します。なかでも非日常世界に入り込む観光は、それが自身の欲求に基づく自由で主体的な活動であるだけに、しばしば知性と感性全体の発展を強く促す刺激に充ちた行為となります。高度化、多様化、グローバル化した今日の観光は、単なる物見遊山や享楽というレベルを超えて、人生を充実させ豊かにする上で極めて重要な役割を担っています。

●観光学を学ぶ楽しさとは？

一般に、興味のあること、好きなことを学ぶことは、非常に楽しいことです。例えば、ゲームが好きな人はその攻略方法を、好きな食べ物があれば人はその調理方法に関心を持ち真剣に学ぼうとします。このことは、学ぶ楽しさが生まれるかどうかは、その対象への興味・関心の有無や大きさに依存することを意味しています。

同様に、観光に興味・関心があること、このことこそが観光学を楽しく学ぶための前提であり、ほとんどの人はその資格を備えているでしょう。私たち人間は、様々な物事を習い、経験を重ね

ることで多様な技能を身につけますが、「観光を楽しむ」力もまた、一定のトレーニングによって深化できるものです。大学で観光について専門的に学ぶことを通して、皆さん自身の人生がより豊かなものにできるのであれば、それはとても楽しいことではないでしょうか。

自由な活動としての観光を豊かに実現する上で、問題に対する科学的な認識の発展は大きな力となるでしょう。大学で観光学を学ぶことの意義とは、まさにこうしたこの点にあるといえます。物事に対する科学的な見方を身につけることは、私たち自身がより自由に生きることです。科学の探究の場である大学で観光学を学ぶことを通じて、皆さん自身の観光を「楽しむ力」をさらに高め豊かな人生を共に歩んでいきましょう。

●「楽しむ力」と「生きぬく力」

大阪観光大学の教育は、基本的には「楽しむ力」と「生きぬく力」の二本柱からなっています。

まず、「楽しむ力」の教育です。たとえば、棚田が織りなす景観が美しい集落を訪れた場合を例に考えてみましょう。目の前に広がる棚田群の景観に美しさを感じられるかどうかは、観る人自身の感性や経験、知識に委ねられます。豊かな感性が育まれていれば、壮大な棚田群の景観を作り上げた人々の営みにまで思いを馳せて目の前の景観を鑑賞することができるでしょうし、風や匂いともにその景観を味わうことができるでしょう。また、棚田作りを経験したことがある人や、アジアの原風景とも言われる棚田の景観は減りつつあり貴重な文化的景観になってきているといった知識を持つ人であれば、さらに深く目の前の景観を鑑賞することができるでしょう。さらに、現地の人と会話を交わすことができれば（これには語学力やコミュニケーション力が必要でしょう）、その観光体験はより一層豊かなものになるはずです。このように、知識や感性、語学力を含むコミュニケーション力を内容とする「楽しむ力」を伸ばす
（磨く）ことで、私たちの観光体験はさらに豊かなものとなります。

以上は、言わば、観光を享受する市民（観光者）を育てるための教育です。これと共に、観光を提供する人（観光事業の担い手）を育てるための教育が必要です。本学では、これを「生き抜く力」の教育と位置づけています。観光の楽しさは、観光を楽しむ対象や手段が十分に提供されてこそ実現できるからです。その意味では、観光事業者や交通事業の担い手の育成が欠かせません。こうした条件は、基本的には観光関連事業者の手によって、言わば仕事として提供さ

れます。そうである以上、観光を提供する人は、様々な競争環境の下で仕事の遂行を通じて現代社会を生きぬいて行かねばなりません。「生きぬく力」が求められる所以です。

ただ、いずれの場合でも楽しむことは私たちが生きていくための原動力であり、その意味で、「楽しむ力」は、現代を生きる私たちにとって生きがいであり不可欠な力といえるでしょう。さらに観光を提供する側も、観光する人々を楽しませることができなければなりません。他者を楽しませるためには、まずは自分が他者の楽しさを理解し共感していることが大切です。その意味では、「楽しむ力」の育成は「生きぬく力」の前提であり、現代社会を生きる社会人としても市民としてももっとも必要な力と言えます。

大阪観光大学は、そうした意味で楽しむ力を育むことを基本理念とする大学です。

2024 年 9 月 10 日

楽しむ力研究会 Q&A 作成チーム代表
大阪観光大学学長 山田良治